第十回茶話会

地蔵十王経(満中陰後編) 2023年1月29日

第十回の目次

□ 前回の復習:満中陰と年忌法要の歴史

- □ 佛説地藏菩薩發心因緣十王經(地蔵十王経)
- □ 仏心偈(雪山偈)

- □ 江戸時代の地獄
- □日本の地獄観光

復習:満中陰とは

■ 死んでから生まれ変わるまでの期間・存在を 中陰(=中有)という

□ 四十九日(=七七日)の事を

満中陰と言う

転生し、この世に生まれ変わる日

: 大毘婆娑論(100-150) インド小乗仏教



復習:インドの輪廻

□ ブラーフマナ (-600)輪廻の概念が生まれる

□ 大毘婆娑論(100-150)輪廻の詳細が固まってきた中有の概念の登場死後の行先の自動決定(自業自得)



復習:中国発祥の年忌法要

- □ 仏教の輪廻転生と儒教の服喪を合わせた
 - 仏説預修十王生七経:中唐時代(766-826)
 - 年忌法要(七七日、百ヶ日、1年、3年)を定めた
 - ・生前の預修斎、後世経典には中国発祥の追善斎 (→自業他得の生まれ)
 - 3年は服喪の期間であり、この期間は中陰とした (by礼記)

復習:日本の年忌法要

- □ 仏教伝来(552)以前は弔い上げ30年
- □ 仏教から死後観の広がり 『往生要集(984)』による地獄の凄惨な描写

□ 仏説地蔵菩薩発心因縁十王経(地蔵十王経)成立 (平安末期~鎌倉初期 1100-1200)

□ 室町時代(1336~)に十三仏信仰:三十三年忌となる

佛説地藏菩薩發心因緣十王經

預修十王経を膨らませた経典 預修では閻魔=地蔵のみだったが、 十王に対応する本地仏が当てられている事が特徴



↑ 地蔵十王経(江戸前期) 国立国会図書館 デジタルコレクション

多くの類似・同名経典が存在

①浄土系②天台日蓮系③真言系 が存在 対応する仏はそれぞれで違い、しばらく安定しなかった 浄土系の力が強く、のちに①が主流となる(次頁)

中国の預修十王経に注釈と、日本独自の地獄の鬼(奪衣婆・懸衣翁・賽の河原など)を追記した

初七日 体説預修十王生七経 仏説地蔵菩薩発心因縁十王経(忌名) 1二七日 第一七日 案記記 第一秦広王 木鍋角記 赤巓島 1二七日 第二七日 初記記 第二 初江王 釈迦如来 以芳島 1二七日 第二七日 初記記 第二 本部 文殊菩薩 海水島 1四七日 第二七日 報三七日 茶品記 第二 本帝王 文殊菩薩 冷水島 1四七日 第二七日 葡華記 第二 本帝王 大級書 小級書 1四七日 第二七日 養記記記 第二 平等王 地蔵菩薩 公,級島 1二日 第二七日 茶品記 第二 平等王 規世音菩薩 公,級島 1日記日 第八日日 学等主 第八 平等王 規世音菩薩 公,級島 1日記日 第八日日 学等主 第八 平等王 規世音菩薩 公,級島 1日記日 第八日日 学等主 第八 平等王 規世音菩薩 公,級島 1日記日 第八日 学等主 第八 平等王 規世音菩薩 公,級島 1日記日 第八日 新市主 新成如素 八,級島 大, 統記 1日記日 第十三年 五道転輪王 阿城的東 八,公< 大, 統記 1日記日 第十三年 五道転輪王 阿城的東 八,公 長, 公 大, 公 1日記日 <th>(点) (</th> <th>今十回识</th> <th></th> <th></th> <th></th> <th>二十七回点</th>	(点) (今十回识				二十七回点
(小説預修十王生七経 ((記地蔵菩薩発心因縁十王経 ((忌名) 第一七日 (秦広主) 第二 表) 第二 表) 第二 2 第二 4 日 (長) 第二 七日 初江王 第二 4 日 (長) 第二 4 日 (長) 第三 4 帝王 第三 4 帝王 東西如来 (長) 第三 4 日 (長) 第三 4 帝王 東西如来 (長) 第三 4 日 (長) 第二 4 日 (長) 第二 4 日 (長) 第十 5 日 (長) 第 5	(大士県	爱染明王			H
(点) ((思実売				三十三回忌
(4説預修十王生七経 (点地蔵菩薩発心因縁十王経 (忌名) 第一七日 装置主 第一 泰広王 (本勤) 明宝 赤端 (京元)	(落明				十七回顷
(小説預修十王生七経 (点地蔵菩薩発心因縁十王経 (忌名) 第一七日 蒙武王 第一 泰広王 赤崎明主 赤崎東	(最高) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本	称名点	大日如来	11	十三化》	沙回三十
(小・成の) ((小級) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1	137	阿閦如来	†	十三化》	九回河
(小級) ((元) ((元) (元) ((元) (元) (元) ((元) (元) (元	4、記預修十王生七経 仏説地蔵菩薩発心因縁十王経《忌名》 第一七日 紫広王 第一 泰広王 木動明主 赤いま 第二七日 初江王 第二 初江王 釈迦如来 以芳忌 第三七日 奈帝王 第四 五官王 普賢菩薩 がえき 第五七日 閻羅王 第四 五官王 普賢菩薩 がえき 第六七日 変成王 第六 変成王 弥勒菩薩 (小級) 第七七日 大山王 第七 太山王 第八 平等王 観世音菩薩 卒災 第九一年 都市王 阿閦如来 (大般) 第九一年 都市王 阿閦如来 (大般) 第九 十年 都市王 阿閦如来 (大般) 第九 十年 都市王 阿閦如来 (大般) 第二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	大祥記	阿弥陀仏			河回川
(4.説預修十王生七経 (4.説地蔵菩薩発心因縁十王経 第一七日 秦広王 (本) 明主 第二七日 初立宝 第二 泰広王 (本) 明主 第二七日 初立宝 第二 初江王 釈迦如来 第三七日 茶帝王 第三 宋帝王 (文殊菩薩 第五七日 閻羅宝 第五 閻魔王 地蔵菩薩 第六七日 交成主 第六 変成王 が助菩薩 第七七日 大山宝 第七 大山宝 第七 大山宝 第七 大山宝 第七 大山宝 第七 大山宝 東師如来	(4.説預修十王生七経 (4.説地蔵菩薩発心因縁十王経 第一七日 秦広王 (4.記地蔵菩薩発心因縁十王経 第二七日 が江王 第一秦広王 (木) 明皇 第二七日 初江王 第二 初江王 釈迦如来 第三七日 東帝王 第三 宋帝王 文殊菩薩 第五七日 閻羅王 第五 閻魔王 地蔵菩薩 第六七日 変成王 第六 変成王 弥勒菩薩 第七七日 大山王 第七 太山王 歌助菩薩	小祥記	男本では勢至善廉 阿累如来		中	一周点
(4.説預修十王生七経 (4.説地蔵菩薩発心因縁十王経 第一七日 紫茂宝 第一 泰広王 木動明王 第二七日 初江王 第二 初江王 秋迦如来 第三七日 完全記 第三 宋帝王 文殊菩薩 第五七日 閻羅王 第四 五官王 普賢菩薩 第六七日 変成王 第六 変成王 班蔵菩薩 第七七日 大山王 第七 太山王 東師如来	(4.説預修十王生七経 (4.説地蔵菩薩発心因縁十王経 第一七日 秦武皇 第一 秦広王 木動・明主 第二七日 初記主 第二 初江王 釈迦如来 第三七日 荣帝主 第三 宋帝王 文殊菩薩 第五七日 闇羅主 第四 五官王 曹賢菩薩 第六七日 変成 王 第六 変成王 弥勒菩薩 第七七日 大山王 第七 太山王 楽師如来	が明明	観世音菩薩		平田平	百箇日
仏説預修十王生七経 仏説地蔵菩薩発心因縁十王経 第一七日 ※広王 第一泰広王 本勤明王 第二七日 が記型 第二 初江王 釈迦如来 第三七日 茶音王 第三 宋帝王 文殊菩薩 第四七日 五官王 第四 五官王 普賢菩薩 第六七日 変成王 第五 閻魔王 地蔵菩薩 第六七日 変成王 第六 変成王 弥勒菩薩	(4.説預修十王生七経	大練忌	薬師如来		Ш	ct
仏説預修十王生七経 仏説地蔵菩薩発心因縁十王経 第一七日 操設型 第一秦広王 本勤明至 第二七日 初江王 第二 初江王 釈迦如来 第三七日 荣誉王 第三 宋帝王 文殊菩薩 第四七日 五管王 第四 五官王 普賢菩薩 第五七日 閻羅王 第五 閻魔王 地蔵菩薩	(4.説預修十王生七経 (4.説地蔵菩薩発心因縁十王経 第一七日 紫茂主 第一 泰広王 木動明王 第二七日 初記主 第二 初江王 釈迦如来 第三七日 紫帝主 第三 宋帝王 文殊菩薩 第四七日 五管主 第四 五官王 普賢菩薩 第五七日 閻羅王 第五 閻魔王 地蔵菩薩	超弘忌	弥勒菩薩		Ш	六七日
仏説預修十王生七経 仏説地蔵菩薩発心因縁十王経 第一七日 紫茂王 第一秦広王 本勤明王 第二七日 初江王 第二 初江王 釈迦如来 第三七日 荣帝王 第三 宋帝王 文殊菩薩 第四七日 五管王 第四 五官王 普賢菩薩	4. 記預修十王生七経 仏説現修十王生七経 仏説地蔵菩薩発心因縁十王経 第一七日 場記里 第一秦広王 本勤明王 第二七日 初記王 第二 初江王 釈迦如来 第四七日 五管王 第四 五官王 普賢菩薩	小線点	地蔵菩薩			五七日
仏説預修十王生七経 仏説地蔵菩薩発心因縁十王経 第一七日 紫云莹 第一秦広王 木勤明至 第二七日 初江王 第二 初江王 釈迦如来 第三七日 宋帝王 第三 宋帝王 文殊菩薩	1	阿況点	普賢菩薩	五官	Ш	日子四
仏説預修十王生七経 仏説地蔵菩薩発心因縁十王経 第一七日 秦広王 第一秦広王 木動明王 第二七日 初江王 第二 初江王 釈迦如来	4 (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)	海水点	文殊菩薩	[11]	Ш	4
仏説預修十王生七経 仏説地蔵菩薩発心因縁十王経 第一七日 秦広王 第一 秦広王 木動明王	4 (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)	以芳忌	釈迦如来	11	H 11	
仏説地蔵菩薩発心因縁十王経	仏説地蔵菩薩発心因縁十王経	すが、き	本的明王 不動明王	1	H 7	初七日
			公田線十王経	仏説地蔵菩薩発	仏説預修十王生七経	
			1		T E J	

三十三回記

《十三仏》第十三

できんまう王思慈

虚空蔵菩薩

がほう言

地蔵十王経の物語

釈尊の涅槃の間際、集まった人に閻魔の地獄の苦しみを説く

人が臨終する時、閻魔法王は獄卒を遣わして、 人の魂・精・魄という3つの魂を捕縛する 亡者は十王の元を通り、審判と罪の責め苦を受ける

釈尊が十王について説いた後、諸王たちは現世に移りたいと釈尊に言うが、 「諸王たちの過去生に問題があり、善を憎み悪を楽しむ者だったから閻魔国に 生まれるのだ。心を持った者は皆、仏性を備えており、悟りを得ることができ る。その仏性により苦から逃れることが出来るだろう。」

釈尊は仏性偈(次頁)を示した。閻魔国の者は不退転の境地を得て、喜んで涅槃処を後にして帰り、信仰深く努めて励んだのだった。

仏性偈 (雪山偈)

□ 原始経典(前1世紀)涅槃経の偈

諸行無常 是生滅法

生滅滅已 寂滅為楽

作られた物は全て無常である。生じては滅していく事が本性である。 生滅するものがなくなり、静まっている事が安らぎである。

□ 雪山偈の名の由来は、大乗仏教の涅槃経(400年頃、漢訳後)に出る物語 釈尊の過去世:雪山童子(せっせんどうじ)が雪山において羅刹(食人鬼) から聞き伝えられたとされる

第一七日 秦広王(しんこうおう)

死天山の南門、二羽の鳥 に追い立てられ、鋭い刃の イバラの門を通る

南門を通るときに門柱に挟まれ再度死ぬ

- □ 秦広王
- □ 無益な殺生を問う 尋問は鉄杖で叩かれ、 答えるのも困難 三途の川はまだまだ先





第二七日 初江王

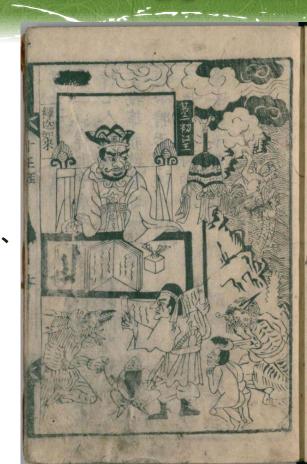
奈河津(三途の河)を渡る亡者 渡る場所は

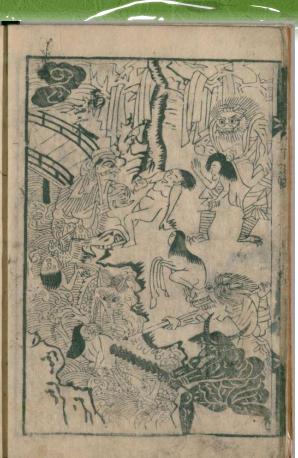
橋・急流・深みの3つ有る

奪衣婆と懸衣翁が、 服を脱がせて大樹の枝にかけて、 罪の重さを量り、王に報告する

牛頭の鉄棒、馬頭の叉に打たれ て河を渡る

- □ 初江王
- □ 盗みを問う





第三七日 宋帝王(そうていおう)

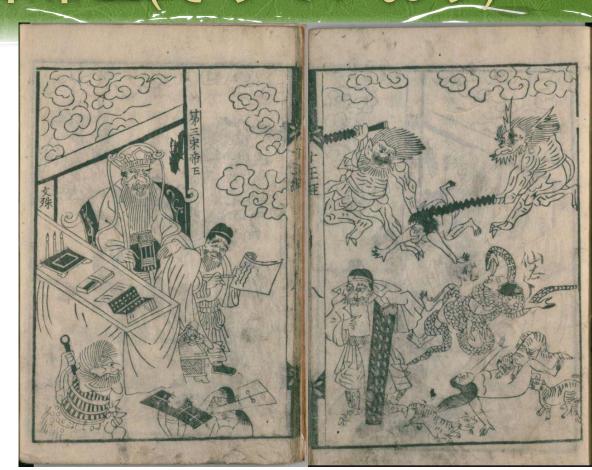
悪猫と大蛇の集まる庁舎 亡者は乳房を破られ体を縛られる

獄卒は言う

「無慈悲で責めるのではない。 汝の邪淫の業のためである。次 王の責めはどれほどか、見当も つかぬ。」

- □ 宋帝王
- □ 邪淫を問う

亡者たちは、冥途の長さと険し さを、地名を聞いて「まだここ か」と思い知る



第四七日五官王

天秤で

- 一斤(600g)を超えれば、重罪 十六地獄に割り当てられる
- 一両(37.8g)は中罪・餓鬼罪
- 一分(0.0004g) は下罪・畜生罪 秤に近づくだけで勝手に秤が動 き出す、隣の勘録舎ではそれを 検印する
- □ 五官王
- □ 不妄語戒など7つの悪業を 測る

罪業の軽重は無情にも昔の自分 の所業それだけ





第五七日閻羅王

【双童子】生前の全ての善悪(右左)を記録し閻魔に報告する

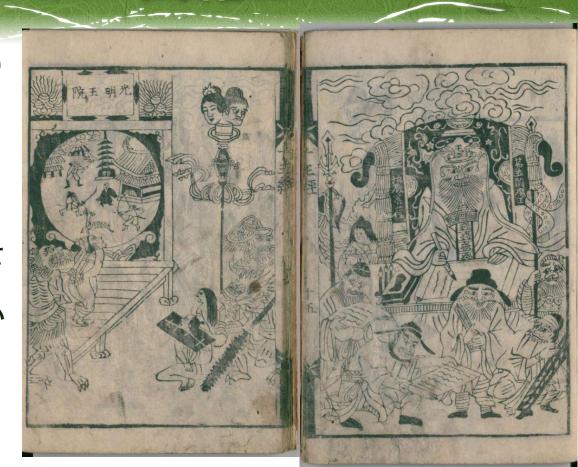
【人頭杖】人の本性を見抜く

【光明王院の浄頗梨鏡】

閻魔に髪を掴まれ、亡者はすべて を写される

「生前にこの鏡を知っていれば悪い ことはしなかった」と驚き震える

- □ 閻羅王
- □ 生まれ変わる六道の決定をする

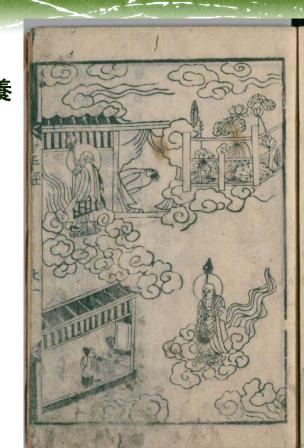


第五七日地蔵菩薩

次に閻魔は 十斎日(月に10日決まった仏に供養 する)を修習する方法を説く

地蔵菩薩の入定する宝処【善名 称院】と、地蔵の一切衆生を救わ んとする誓願と功徳を説く

- □ 閻羅王=地蔵菩薩
- □ 償いの方法を教える



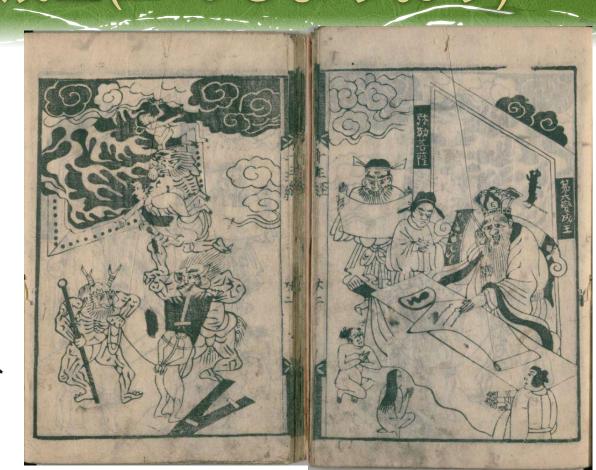


第六七日変成王(へんじょうおう)

罪の軽量は済んでいる 亡者に罪あれば悪を問いつめて 愚かさを戒め、福あれば善を勧 める

- □ 変成王
- □ 八大地獄の何処へ転生する かを定める

亡者は恐怖が迫り愚を諭される、 仏の功徳を日々願う



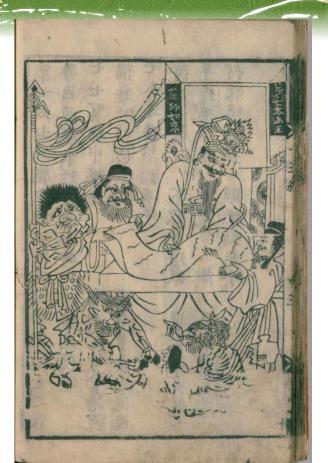
第七七日 大山王(たいざんおう)

中陰が冥途に来てから四十九日 転生の条件を調べる 善業の判決はまだ未確 定で、亡者にもたらされる追善(遺族の功徳) があれば・・・

- □ 大山王
- □ 転生先の父母を求める

亡者は飲まず食わずでもうたまらん 残した財産けちらずに追善を成して我を助け ろ

亡き親が地獄落ち、知らぬ子どもは静かに暮 らすのか、地獄の苦しみは何より恐ろしい



第八百箇日平等王

内心は慈悲に満ちているが、外見は憤怒 の表情である

布施する者は教え導き、貪欲者には罰を 与える

- □ 平等王
- □ 貪欲者には追加の罰を与える

亡者は100日経っても苦は止まない 手枷足枷、鞭で血だらけ 生者からの追善供養で生天するやもしれん

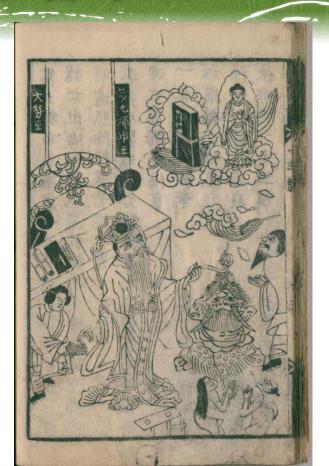


第九一周忌都市王

1年経って亡者はまだ辛苦する 極悪の者や極善の者は既にしかるべき場 所に転生しており、ここは微悪・微善の 者が訪れる

- □ 都市王
- □ 哀れみにより追善を呼びかける

怒りを捨てて亡者を救えよ 写経や造仏による追善があれば、次は仏 になるかもしれん



第十三周忌五道転輪王

- □ 五道転輪王
- □ 三度目の関所を超えて ここに来た悪人どもは、不善なす者であり、生まれ 変わっても1000日立たずに死んでしまうだろう
- □ これは放逸と邪見、それこそ過ちで愚痴無智、それは許されぬ罪
- □ 過と罪が車輪のごとくに回転し、我らは向かう三途の地獄













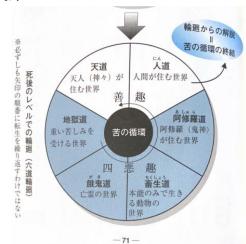
地蔵十王経まとめ

□ 恐ろしい地獄の様子から、
死後そこに故人が行かない為の方法を書いた経典

□ 浄土教が広めた 人は死後、浄土に行く という常識 本来のインドでは考えられないが、

日本古来の「あの世とこの世」観に合致した

■ 極楽浄土と地獄を 並べて考えるのは日本だけの特徴的なこと



江戸時代の地獄

- □ 平和の世で地獄は身近になる
- □ 閻魔大王は話のネタに
- □ 地獄谷が各地に点在(霊山と隣り合わせ)
- □ あの世よりも、この世が地獄であるとも ↑地獄めぐり 別者の血の池地獄温泉



→ 道成寺绘詞(賢学卓子) 女性を怒らせると化けて出て追っかけられて奈落まで連れて行かれる(国立公文書館より)



杉彫刻や絵になった冥土の住人

十十三による裁判や予道のようすは、 古来から多くの絵にかかれました。 また、地獄の主ともいわれる 閻魔王の像もつくられ、 人びとの信仰の対象になりました。

★ 大造閻魔王坐像

(鎌倉時代 円応寺所蔵 重要文化財)

神奈川県鎌倉市の竹広寺は、閻魔王の像を本尊と しているという、全国でもめずらしいお寺です。

この木造閣魔主坐像は、彫刻家として名高い運慶の作であると伝わっており、国の重要文化財に指定されています。運慶は一度死にかけたのですが、閻魔主に「わたしの像をつくれ」といわれ、生きかえりました。運慶がわらいながら像をほったため、像もわらっているような顔になったといいます。この像は「わらい閻魔」とよばれるようになり、人びとに親しまれています。



「閻魔堂」ともよばれる本堂のなかには、閻魔主の像のほか、初江主などほかの十主の像もある。 (写真提供:鎌倉市観光協会)



| 冥土にまつわる名所

死後の世界があるかどうかは、だれにもわかりません。 しかし、死後の世界へ通じるとされていたり、地獄の名所の 名前がつけられたりした場所は、実際に日本各地にあります。



六道珍皇寺の門の前には、「六道の辻」の石碑がたっている。 (写真提供: 六道珍皇寺)

→ 六道珍皇寺



★載記以表表



黄泉の国の入り口をふさいだといわれる 「千ず」の岩声」がある。

ミにあいにいったという伝説(→6・7ページ)があり、日本最古の歴史書とされる『古る登場する場所です。

島根県松江市東出雲町撮屋



禁山の主達の前にはたいこ橋がかけられており、悪人にはこれが針の 山にみえてわたれないといわれる。 (写真提供: 音楽運輸発運動)

猪目洞窟

出雲笛(いまの嶌根草)の歴史や文化をしるした古代の書物『出雲笛嵐土記』には、「夢でこの洞窟のあたりにくるのをみたら、必ず死ぬ。むかしからここは黄泉の坂、黄泉の穴とよばれている」という記述があります。それはこの洞窟のことだといわれています。

島根県出雲市猪目町1338



猪自洞窟からは、縄文・古墳時代の死者のとむらいかたや、生活のようすを物語る多くの出土品が発見されている。 (写真提供: 畄会観光協会)

★芸術での消費

日本で「兰途の前」「兰途前」と名づけられた川は、いくつかあります。そのひとつは、青森県・下北羊島の恐山にあります。恐山は滋賀県の此叡山、和歌山県の高野山とならんで日本三大霊場のひとつとされ、古くから死者のたましいが集まるところと信じられてきました。その中央にある宇曽利湖から流れでているのが兰途の前です。

፟賽の河原

「賽の河原」とよばれる場所は、日本各地にあります。賽の河原で苦しむ子どもたちをすくってくれるのが地蔵菩薩だとされるため、お地蔵さまが設置されています。参拝者によってつくられた石積みやおもちゃなどのおそなえものがみられます。



「養の角原」とよばれ、北海道の監場のひとつとされる 集児島の指標師。海岸にはおさなくして亡くなった子ど もや海で亡くなった人の供養の石積みがならんでいる。 (写真提供:東房町接域武策線商工報光像)

現在の日本

- □ 三十三年忌は、輪廻とは程遠い インド仏教と袂を分けた中国仏教から、更に袂を分けた日本独自の仏教
- □ 皆が僧侶によって浄土へ導かれ、
 地獄は恐ろしい場所ではなく身近なものである
- □ 言葉の定義では四十九日が満中陰 弔い上げは33年
- □ 日本人の感覚としては、故人は家の守り神にいずれなる 永遠に見守ってくれる存在である

氏神様(一族の始祖) ← 先祖様 ← 故人の魂

参考文献

十三仏信仰の意義 臨済宗黄檗宗連合 各派合議所二〇一六年 宮坂宥洪

日本の地獄・極楽 なんでも図鑑(1 松尾恒一監修

民間信仰の話

廣瀬南雄

岩波 仏教辞典 第二版

中村元監修新・佛教辞典

武田鏡村 日本歴史宗教研究所所長 総図解よくわかる仏教 新人物往来社

宗学概論